

## 選定名称

## 宮津天橋立の文化的景観

## 仮訳

Cultural Landscape of Miyazu and Amanohashidate

## ■文化的景観の区域・面積

選定年月日	1105.9ha
平成 26 年 3 月 18 日	
追加選定年月日	158.7ha
平成 27 年 1 月 26 日	
一部解除年月日	△ 9.5ha
平成 27 年 1 月 26 日	

## ■位置



## ■解説

京都府の北部、丹後半島の南東に位置する宮津湾は、東・南・西の三方を標高約 150 m の山地に囲まれている。湾の西部では砂礫により天橋立の砂州が形成され、宮津湾と阿蘇海とを隔てる地形となっている。このうち、宮津湾西岸から阿蘇海北岸に位置する府中地区は、標高約 20 m にかけて緩やかな段丘地形となっており、集落および農地が営まれている。さらにその北部は急峻な山地地形となっており、シイ・タブ・カシ、アカマツおよびそれらを改植したスギ・ヒノキ等の樹叢が展開している。海面・海岸砂州から急に山地が立ち上がる独特の地形が、古くから信仰・観光の対象として人びとを惹きつけてきた。

府中地区は、古代丹後国府の地と比定されており、国分寺跡が所在する。現在も、阿蘇海と北部山地とに挟まれた平地では、条里制に遡るとされる地割りの農地が営まれている。また、14 世紀末に一色氏が丹後守護職に任命されると、その後中世を通じて、この地域の整備が進められた。16 世紀の成立とされる「成相寺参詣曼荼羅」には、西国三十三所霊場の成相寺を訪れる人びとの姿が生き生きと描かれるほか、16 世紀初頭に雪舟が描いた「天橋立図」等では、成相寺および丹後国一宮である籠神社の門前等に人家が密集している様子が描かれており、このころすでに当地は、中心地として機能した都市が成立していたことがわかる。

近世に整えられた宮津城下町が、参詣の拠点として機能し始めると、府中地区はますます隆盛することとなった。江戸時代前期に描かれた「和歌浦・天橋立図屏風」には、天橋立を行き交う人びとが描かれており、天橋立が参詣道として機能していたと考えられる。このほか、宮津湾・阿蘇海には多数の舟が描かれており、府中地区が多くの人びとを惹きつける信仰・観光の中心地として栄えたことがわかる。このころ、天橋立が日本三景の一つとして成立したとされる。

近代になると、大正 12 年（1923）に天橋立が京都府立公園に指定され、昭和 2 年（1927）には成相電気鉄道（現・天橋立鋼索鉄道、別称・傘松ケーブル）が整備されるなど、観光都市としての整備が進んだ。大正 13 年（1924）に舞鶴－宮津間で鉄道が開通し観光客が増大すると、籠神社や大垣集落の一の宮棧橋周辺には、土産屋および旅館等が軒を連ねる町並みが形成された。第二次世界大戦後は、海水浴・スキー・研修等を目的とした観光客が増えるなど観光形態は徐々に変容しているが、昭和 39 年（1964）に運輸省（当時）により国際観光ルートに指定された宮津市の中でも、当地は観光拠点の一つとして位置づけられる。

府中地区では、生産的機能も確認される。阿蘇海と北部山地との間に展開する段丘地形では、平坦部を利用

しておもに水田が営まれている。国分・小松・中野などの農業集落は主として旧道沿いに単列の街村形態をなしており、石積みで造成された平場に主屋・納屋・蔵・ニワ等からなる居住地を形成している。集落内の旧道に沿って石積みの水路が設けてあり、水路には各戸から接近し洗い物等を行うアライバと呼ばれる施設が備えられている。他方で、溝尻など阿蘇海に面する漁業集落では、かつてキンタルイワシ（金樽鯛。金太郎鯛ともいう）と呼ばれたマイワシ漁が盛んであり、宮津市の特産物であるオイルサーディンの缶詰に加工されて全国に流通した。溝尻では、現在も阿蘇海に面して舟屋が立ち並んでおり、主屋・インキョ・舟屋・ハマからなる独特の居住形態を継承している。

このように、宮津天橋立の文化的景観は、中心地機能を維持しながら発展してきた当地の歴史的重層性を示す土地利用の在り方と、宮津湾西岸および阿蘇海北岸で営まれる農業・漁業による土地利用の在り方が複合した文化的景観である。日本三景の一つに数えられる著名な信仰地・景勝地であるのみならず、段丘を活かした農村および特徴的な居住形態を示す漁村が複合した景観地として独特であることから、わが国民の生活・生業の在り方を理解する上で欠くことのできないものであり、重要文化的景観に選定し、保存・活用を図るものである。

出典/『月刊文化財』第 605 号

京都府の北部、丹後半島の南東に位置する宮津湾は、東・南・西の三方を標高約 150m の山地に囲まれている。湾の西部では砂礫により天橋立の砂州が形成され、宮津湾と阿蘇海とを隔てる地形となっている。この地域は、古代から丹後地方における中心地としてのみならず、日本三景の一つに数えられる著名な信仰地・景観地として機能しており、独特の文化的景観が形成されてきた。このうち阿蘇海およびその北岸に展開する府中地区は、丹後地方の中心地として機能しながら発展してきた当地の歴史的重要性を示す土地利用の在り方と、宮津湾西岸および阿蘇海北岸で営まれる農業・漁業による土地利用の在り方が複合した文化的景観として、平成 26 年 3 月 18 日に重要文化的景観に選定された。

今次追加選定申出にかかる文珠地区は、阿蘇海南岸

の地域である。当地は日本三文殊の一つに数えられる智恩寺を核として発展した地域で、室町時代には足利義満が 6 度にわたり智恩寺に詣でたとされるなど、古くからの参詣地であった。17 世紀前半に宮津の城下町が整い、宮津から文珠・天橋立を経て府中に至る陸上交通および海上交通が整備されると、少なくとも 17 世紀後半には智恩寺門前に臨時的な「出茶屋」が設けられ、参詣客を相手とした商売が始まったとされる。18 世紀初頭には常設の店舗を構えるようになり、享保 11 年 (1726) の「丹後国天橋立之図」には、「四軒茶屋」と称する四軒の茶屋が描かれている。明治 40 年 (1907) の皇太子行啓以降は、対橋楼・玄妙庵・千歳楼などの旅館建築が海岸および山の中腹に展開するなど、文珠地区は文珠・天橋立の信仰および観光の中心として機能してきた。

文珠地区では、沼沢が発達し陸地が狭小であったため、もともと山裾に集落が展開していた。江戸時代から明治時代にかけて、海岸の干拓により新田開発が進められると、米の生産量が増加し人口も増えた。大正時代に丹後鉄道および府道が整備されると、鉄道駅前および府道沿道を中心に市街地化が進んだ。

近世には、智恩寺の南側に船着き場が設けられ、対岸の天橋立に渡し舟を出していた。現在も同様の位置に棧橋を設置し、遊覧船が府中地区と文珠地区との間を往来している。また、かつては山際まで入江が発達しており、文珠地区から山を隔てた西側の須津地区へ耕作に向かう舟や、阿蘇海でアサリ漁を営む舟などを入江に係留していた。「どんぶち」と呼ばれる沼地は入江の痕跡を示すもので、海岸には現在も舟屋が立地している。

このように、宮津天橋立の文化的景観のうち文珠地区は、智恩寺参詣の中心地および天橋立参詣の拠点として展開してきた地域であり、信仰および観光によって発展を遂げてきた土地利用の歴史的重層性を示す景観地であることから、重要文化的景観に追加選定し、保存・活用を図るものである。

なお、阿蘇海水面において宮津市および隣接する与謝野町の市町境が変更されたことに伴い、市域外となった既選定区域について一部解除し、新たに市域となった区域および文珠地区について追加選定する。

出典/『月刊文化財』第 617 号





府中地区の傘松公園から眺めた天橋立（2017.1）



文殊山中腹から眺めた天橋立（2016.5）



文殊地区の核である智恩寺三門（2017.1）



四軒茶屋や旅館が並ぶ智恩寺門前（2016.5）



土産物店で売られる海産物（2017.1）



近世以来の船着き場を発着する船と回旋橋（2016.5）



阿蘇海から眺めた溝尻の舟屋（2017.1）



府中地区の農村景観（2017.1）